

# 日中両言語における感情形容詞について —一人称制限と表現形式を中心に—

## The research of emotive adjectives in Japanese and Chinese - Focus on expressing emotion and the form of expression-

鄒 賢 (京都コンピュータ学院)

Zou Xian (Kyoto Computer Gakuin)

### Abstract

The paper is about the emotive adjectives in Japanese and Chinese that was focused on expressing emotion and the form of expression. At the finally the research have been found the difference of emotive adjectives between Japanese and Chinese

## 1. はじめに

感情は、社会や文化的要素に影響されず、ある程度、人の間で共通している。よって、感情は、こうした普遍的側面を言語化する際に反映されると予測できる。一方、各言語は異なる性質と構造を有するため、独自の感情表現体系を通して感情を捉える。そういった観点から、本論文は、感情表現体系に属する感情形容詞を対象とし、日中両語の共通点及び相違点を明らかにし、両語の人称制限及び表現形式について考察する。

日本語には、感情形容詞を述語とする際、人称制限がある。それに対して、中国語においても類似の語群が存在するため、それを述語とする際、同様に、人称制限が存在するかどうかについて対照分析を行う。日中両語の感情形容詞は、「人称制限がある」や「人称制限がない」の2つの場合と仮定し、各自制限がある条件を図表化する。さらに、対照分析を通じて、人称制限を有する理由を検討する。

## 2. 研究方法

感情形容詞について、様々な先行研究が存在するが、大まかに語彙論を中心とする研究及び統語論を中心とする研究の2種類に分けられる。日本語における感情形容詞に関する研究は2種類ともある。しかし、中国語では、統語論を中心とする研究がわずかである。

本研究は、寺村(1982・1984)の観点に従い、統語的な観点から日中両言語における感情表現を「述語が形容詞によるもの」、すなわち感情形容詞という概念を研究対象として取り扱う。

本論文は、中村(1993)の『感情表現辞典』と北京大学中国言語学研究センターの現代漢語コーパスをデータとして用い、日中両言語の書き言葉における感情形容詞の使用状況を調査し、日本語と中国語における感情形容詞の制限を考察する。同じことあるいは同じものに対応する感情を表出する際の感情形容詞に対して、表現形式から対照分析を行う。

## 3. 人称制限について

日本語には感情形容詞に分類されている語群があり、それを述語とする際には、人称による制限が存在する。これは、日本語の特徴であり、他言語と著しい違いの1つである。それに対して、中国語においてもそのような語群があるが、この種類の形容詞を述語とする際に、同じように人称制限があるかどうかについて対照分析を行う。

### 3.1 人称制限がある場合

ここでは、まず、日本語と中国語における感情形容詞は人称制限があると仮定し、各自制限がある条件を図表化する。さらに、対照しながら、人称制限を有する理由を推測する。(表1.1)

まず、(1)と(3)から見てみよう。(1)は、著

者が登場する人の立場から、つまり、1人称として感情を表す表現であり、(3)は、著者自身の感情に関する描写である。それゆえ、感情形容詞の原形は、1人称に対する制限があることが分かる。それに対して、中国語の場合では、(2)と(4)に示した通り、人称にかかわらず使うことができる。

- (1) 自分たちの新しい家に思い出を残す方がずっと喜ばしいものに思われた。(『結婚の生態』)
- (2) 対白的本身如果写得适当, 便可表达叙述者的情绪, 而作者不必添用“他愤怒地说”, “他愉快地说”这类副词。  
“从来都是女人向男人收钱”, 你愤怒地说, “没听说男人向女人要钱!”
- (3) 人間のことを想うのは哀しい。(『帰郷』)
- (4) 我很惊讶, 完整地写下了我的中文名字, 很仔细。我真是太兴奋了, 有人想要我的签名!  
听说“大黑”来了, “熟人”和“泰森”立即停止了打闹, 他们两眼放光, 兴奋地随着乱糟糟的人群往前挤。

日本語における感情形容詞は、通常、人の主観的な感覚・感情、内面の動きなどを表す際に用いられるため、1人称に対する制限がある。しかし、例文(5)と(7)を見ると、もともと現在のなものである感情は、回想されたときに既に知的な記憶になると思われる。したがって、感情形容詞が過去形になり、感じ手の感情を表出することではなく、第3者の過去に起こった感情を過去の事実として叙述するので、3人称でも制限がなく用いられる。このような場合、感情形容詞は、人称にかかわらず使うことが指摘される。それに対応する(6)と(8)の例文を見てみよう。中国語では特に過去形がないため、過去の意味がある言葉「～了」を感情形容詞の後に付けることで、感覚・感情主の過去の感情、気持ちなどを人称制限にかかわらず、表出することができる。

- (5) ケイちゃんが子供を抱いて幸福そうなので、吉野君も嬉しかった。(『更紗の絵』)
- (6) 怀特先生却哭得更伤心了, 因为他知道用自己

所用的钱也买不来那根桃木拐杖。

- (7) 今夜は、楽しかった。あんたと2人きりで酒を飲んだのは、今夜が初めてだ。(『人間の壁』)
- (8) 她说：“这实在叫我太伤心了，我到这里来不敢向你说谎，如果我能力得到的事，我一定会向你说明办得到。

(9)～(12)の例文を見てみよう。それらは、全て疑問文である。しかし、(9)～(11)の例文は、ほとんどの聞き手の立場から、相手の感覚・感情を尋ねる疑問文である。(12)と(10)で異なる点は、使役表現「惹人讨厌」を用い、自分のことを相手に尋ねる点である。また、日本語の場合では、2人称を用いる際の制限があると言える。それに対応する中国語の場合には、特に、制限がないと言える。

- (9) あなたはお母さんが憎いの？
- (10) 比如说你吧, 你妈要知道你天天在餐馆打工, 被人呼来唤去的, 会不心疼吗? 你要是毕业了, 找不到工作, 你会告诉你以前的那些同事吗?
- (11) あなたはどんな音楽を聴くのが好きですか?
- (12) 我们真是这样惹人讨厌吗?

以上をまとめると、表1のようになる。

表1 人称制限がある日中対照

日本語	中国語
感情形容詞の原形は1人称のみ使える。	人称にかかわらず使える。
述語は感情形容詞の過去形になって、感覚をもつ主の過去に起こった感情あるいは感覚を過去の事実として客観的な叙述とする場合、人称に関係なく用いられる。	特に過去形がないため、何の人称でも使える。よく過去の意味がもつ「～了」を付けて使用する。
相手の立場から、相手の感情あるいは心理状況を尋ねる疑問文で、感情形容詞は第2人称に使える。	日本語と同じように使える場合もあるし、何の人称にも使える場合もある。

上の図表から、聞き手を対象とする疑問文において、日本語と中国語は、感情形容詞の人称制限について共通している部分がある。総括すると、日本語では、平叙文と疑問文の場合、制限があることが言える。それに対して、中国語における感情形容詞には、特に、人称制限がないことが分かった。

### 3.2 人称制限がない場合

上に述べたことに対して、感情形容詞の人称制限がないと仮定し、対照分析を行う。(表2)

例文(13)と(15)を見てみよう。「情けない」、「憤ろしい」は、後に付いている「気持」、「心地」の状態に関する描写である。そのため、通常、誰かの「気持」、「心地」に関係なく用いられる。中国語の場合では、(14)と(16)を示したように、日本語と同様に用いられている。

- (13) その時の母の情けない気持が彼に映ったのだ。(『冬の夜』)
- (14) 满街都是吃过晚饭, 穿着裤衩背心为中国女排击败大老美 兴高采烈的人群。
- (15) 私は憤ろしい心地になっていた。(『理想の女』)
- (16) 待秦雪梅见到丈夫亡灵, 那一声撕心裂肺的“商郎”, 仿佛堤决岸崩, 其悲伤的感情像开闸的洪水, 一泻无余。

次に、例文(17)と(19)を見てみよう。「～らしい」、「～かもしれない」を用いる表現は、確実なことではなく、何かを見て、何かを感じたことから推測することである。そのため、誰でも他人の気持ち・感覚を推測することができる。その点では、中国語の例文(18)と(20)は、日本語との共通点をもっている。

- (17) 勉強の方がついて行けなくて辛かったらしい。(『更紗の絵』)
- (18) 这里的鱼类从不游往外国的海域, 似乎恋着自己的家乡, 因而有“中国家鱼”的美称。
- (19) 今後も僕は時々淋しいかもしれない。(『友情』)
- (20) 体验过的情感, 那我们大家都知道, 我们都有过喜怒哀乐, 我们都曾经高兴过, 都曾经为了某些事情可能伤心过, 那么这些都是记的过程。

以下に挙げられた(21)～(24)の例文では、

文学作品に登場する人物は、著者が作り上げたものであるがゆえに、その人物の感情を表現する際に、著者は、その作品中の状況の中に自分自身において、感情を表出する。こういった場合において、人称に関する制限がなくなる。

- (21) 佐助はそういう春琴を見るのが悲しかった。(『春琴抄』)
- (22) 望着已拆成断垣残壁的破败家园, 老支书灼红的眼睛里流露出几许伤感, 语调酸楚地给记者讲述了以下故事……
- (23) 返事をしなかった慈念に対する不愉快な感情が, 家に帰るまで続いたのである。(『雁の寺』)
- (24) 我且惊且喜, 摔了个跟头拣得一锭金元宝似的一蹦老高, 真想奔走相告, 把这个特大喜讯告诉全世界, 让世界上受苦受难的同胞分享我的快乐与幸福。继而买了一大堆营养品, 叮嘱她劳逸结合, 注意休息, 以愉悦的心情孕育小生命。

(25)～(28)の例文は、すべて引用である。引用というのは、他人の言ったこと、あるいは、他人のしたことを自分で表現するために取り入れられるものである。そのため、人称に対する制限がない。

- (25) 竹さんは、先生の靴を下駄箱代わりのボール箱に入れて「有難い、有難い……」と言いながら、衝立の向きを変えて入口を塞いだ。(『本日休診』)
- (26) 整整两个小时, 我白白躺在床上, 睡意全无, 邻居家的窗子不断地传来“孤独的人是无耻的”, 寂静中我躺着侧耳聆听, 一遍又一遍。
- (27) あたしはあまり歓迎して下さるので、結婚の挨拶さえ出さなかったことが大変恥ずかしくて、ああ、悪かった、と思った。(『愛撫』)
- (28) 老艺术家夏淳在看完“活雕塑展”后, 称他是“不甘寂寞的人, 不老实的人, 大胆的人”, 创造是他的艺术生命, 他坚守着这块自己认定的艺术阵地, 拒绝艺术以外的各种诱惑。

以下に挙げた(29)の例では、話し手は1人称であると考えられるが、感じ手は決して1人称ではない。この場合、感じ手は、聞き手である2・3人称と考えれば、違和感がない。そのため、(29)のような条件文では、人称に対する制限がない。中国語の場合では、(30)のような条件文において、感情形容詞を述語とした場合、特に、人称に対する制限はなく、用いられると指摘できる。

(29) さびしかったらいつでも家へ遊びにいらっしやい。(『鴉外の思い出』)

(30) a. 如果他们喜欢, 那我就特别高兴; 如果他们不喜欢呢, 我就叫他们每人必须再想一个比我的计划还好的主意。  
b. 如果你幸福, 我不问你会告诉我的。  
c. 假如我们蓦然面对自己的渺小, 我们能逃往何处?

(31) と (32) の例文では、この2つの文は「形容詞+のだ/んだ/のである」という形式である。これらの文は、話し手が、事象に対して感じ手が抱く感覚・感情的な評価を表現している。そのため、一般的に感じ手に対する人称制限がない。中国語におけるそれらに対応する形式は、「是+形容詞+(的)」である。この形式は、日本語と同様に、感じ手自身の感覚・感情的な評価を表している。それゆえ、人称制限がないことが言える。

(31) 彼は少女と会うのが面映ゆかったのである。(『洪水の終わり』)

(32) 孩子一个人在玩耍, 很安静, 你从隔壁可以听到他的声音, 他泡在澡盆里, 一边玩一边发出声音。你会感到他是幸福的。

(33) 僕, あの人, 嫌いなんだよ。(『波』)

(34) 你要恨, 就恨我一个人, 在这件事上她是无辜的! 你不能恨她! 抛下你, 我是无情; 可若抛下她, 我是无情又无义……”

以上をまとめると、表2のようになる。

表2 人称制限がない場合の日中対照

日本語	中国語
感情形容詞は連体修飾する場合には人称に対する制限に関係なく使える。	日本語と同じように使う。
感情形容詞は推量形(「~ようだ」、「~そうだ」、「~らしい」、「~に間違いない」、「~かもしれない」)になると、人称制限がなくなる。	特に制限がない。
文学作品の中で、著者は登場人物の立場から、それらの内的世界のことを読者に伝えるときにも人称制限をかかわらず使える。	日本語と同じように使う。
感情形容詞は引用とする際に、人称制限がない。	日本語と同じように使う。
感情形容詞は、条件文(「のに」、「でも」、「ば」、「たら」)で、2・3人称にも使える。	条件文の場合、人称に対する制限がなく使える。
感情形容詞とする述語は「~のだ」「~んだ」で終わると、主語に対する制限がなくなる。	制限がなく使えるが、不自然である。

感情形容詞の人称制限については、上の図表に対応する例文に示した通り、人称制限に対しては、日本語における人称制限が中国語より厳しいが、場合によって、人称制限を解除することができる。

### 3.3 感情形容詞文の表現形式について

感情形容詞文の構文(表現形式)と言えば、日本語の場合、「感情を表す形容詞」+「する」で表現されることはなく、感情形容詞の意味に相当する動詞の使役形を用い、また、「させる」と「思いをする」を伴う。中国では、感情形容詞を他の動詞を伴って表現される。他の動詞がない場合は、表現できない。

#### 3.3.1 日本語における感情形容詞文の表現形式

一般的な感情形容詞文の構文(表現形式)は、2つの名詞を伴うものである。1つは、感情を抱く主体(感じ手を表す名詞)である。もう1つは、感情の対象または誘因を示す名詞である。

寺村(1982)の感情形容詞文に関する考察によると、感じ手を表す補語は「ガ」あるいは「ニ」となり、感情の対象や誘因を表す補語は「ガ」となる。ただし、感情形容詞文は話し手自身が直接的に感情を表出する場合に用いる表現であるため、感じ手は文中に出ない場合が多々存在し、表出する場合は、取り立てとして、「~ハ」「~ニトッテハ」「~トシテハ」のように、主題の形を取る。言い換えれば、表出されない場合は、「ガ格」または「ニ格」であることが多く、表出される場合、「ハ」によって表される。それで、形容詞の意味特徴によって、2つのタイプに分けられる。

#### a. 感情状態の直接表出のタイプ

## Xニ／ガ Yガ～

このタイプは典型的な感情形容詞による感情表現であり、その感じ手は「ガ」か「ニ」を取る。「主格」の「ガ」という形を取る補語はその述語を中心として展開する事象の中で、いわゆる主役と考えられるものである。「ニ」で表されるものは、従来「与格主語」と呼ばれている。「与格主語」の「ニ」は「ニトッテ」と交替できる。

### b. 感情的判断のタイプ

## Xガ Yガ～

感じ手の取る助詞は「ガ」とはなるが、「ニ」となることは稀である。しかし、「～ガ」は絶対とれないわけではない。例を挙げるならば、「怖い、愛しい、悲しい、嬉しい、楽しい、辛い、ほしい、好きだ、嫌いだ」といった感情の直接表出の機能をもつ述語とは共起できる。

感じ手の取る助詞は「ガ」である。例を挙げるならば、「寂しい、恐ろしい、可愛い、可愛らしい、喜ばしい、望ましい、憎らしい、いやらしい、嘆かわしい」といったような感情的判断を表す述語が挙げられる。

### 3.3.1.1 連用修飾による感情表現

形容詞による感情表現は「感じ手ハ対象ガA」という形で現れるが、「形容詞連用形+なる」や「形容詞ク／ニ／ト思う（感じる）」などを付け加えて表現するものもある。このような連用修飾の表現は感情形容詞本来の意味に、結果や話し手の意志がより強調される。

#### 3.3.1.1.1 「感情形容詞の連用形+なる」

「～なる」は変化表現の1種であるが、「感情形容詞（形容動詞）連用形+なる」は変化の意味をもっていないと考えることができる。「感情形容詞連用形+なる」は、まさに結果を表す表現である。「なる」がついている述語は、感情形容詞だけを述語とする時と同じように、感じ手の気持ちを表すが、「なる」を伴う述語は動的感情を表す。感情形容詞だけを述語とする場合は静的心理状態を描写する。

「感情形容詞連用形+なる」を述語とすると、感じ手の感情、感覚を動的心理状態の変化として捉えることになる。このような動的心理状態の変化は感情表現ではよく用いられ、例として、次の(35)と(36)が挙げられる。

(35) まぐれあたりに思いもよらぬ遠方にボールが飛んでいくと、自分の力が試されたように、嬉しくなった。(丹羽文雄『顔』)

(36) 溪流の釣りを思いながら、私はよく不快な記憶に腹立たしくなってくることがある。(井伏鱒二『白毛』)

(37) この言葉を聞いたとき、代助は平岡が憎くなった。(夏目漱石『それから』)

例文の(37)の感じ手は「代助」であり、「平岡」はここでも感情の対象を表している。そして、「～なる」は全体「代助は平岡が憎い」にかかわる。「代助は平岡が憎い」だけの場合、「代助」の感情の状態を示しているが、「～なる」を付加すると、その結果、つまり、1点にしぼる機能が与えられることを指摘できる。

#### 3.3.1.1.2 「感情形容詞の連用形+思う」

感情形容詞の連用修飾は「～なる」以外、「～思う」が多々存在する。表現形式は次のようになる。

## XハYヲAク／ニ／トV

この文型によく使われる動詞はそれほど多くない。「思う」「感じる」「思われる」「感じられる」といった程度である。

(38) 代助はこんな場合になると何時でもこの青年を気の毒に思う。(夏目漱石『それから』)

(39) 彼は歯並みの好いのを常に嬉しく思っている。(夏目漱石『それから』)

(40) 従って、それを自分の脊に負うて、苦しいとは思えなかった。(夏目漱石『それから』)

例文の中では、(38)のような「連用形+ク／ニ+思う」と(39)と(40)のような「(感情形容詞)ト思う」の2つに分けられている。森田(1981)によると、「連用形+ク／ニ+思う」は情感の内容を直接示している。「(感情形容詞)ト思う」は引用形式によって、間接的に示す。森田(1981)は、さらに、「～く思う」は主観的で非分析的、「～と思

う]が客観的で分析的という傾向があると指摘した。

### 3.3.1.2 使役文による感情表現

感情形容詞の場合では、形容詞の連用形+「する」ではなく、形容詞の連用形+「する」の使役形「させる」、あるいは、感情形容詞の意味に対応する動詞の使役形を使う使役文で感情を表出する。

#### 3.3.1.2.1 「させる」

「する」がある「状態の生起」を表すのに対し、「させる」は「動的事象の生起」を表す。「させる」の使用は日本語が感情を「動的事象」と捉えていることを示すと言ってもよいだろう。(41)～(43)はこれに該当する例文である。しかし、「させる」はどんな感情形容詞とでも共起するわけではない。例えば、(44)のように用いた場合、非文になる。

- (41) 酒は今日も私を悲しくさせる。(『三毛猫ホームズの怪談』)
- (42) 君を不愉快にさせるつもりはなかった。(『砦に立つ貴婦人』)
- (43) みんなを楽しくさせるスタンダードジャズの恰好の例だ。(『金閣寺』)
- (44) \*今日一日、子供たちを楽しくさせてあげてください。

#### 3.3.1.2.2 「形容詞+思いする」

使役形による感情表現の構文(表現形式)では、「させる」によるものだけではなく、形容詞の使役の意味の表現に使われるもう1つの形「形容詞+「思いをする」」も存在する。(45)～(47)はこれに該当する例である。

- (45) こんな悲しい思いはしたことがない。(『赤い蠟燭と人魚』)
- (46) 年とって、寂しい思いをしなくてすむ。(『こころ』)
- (47) 両親と同居したら、また嫌な思いをするだけだ。(『私の個人主義』)

この表現は、(48)と(49)のように、感情を含む使役表現に使うこともできる。

- (48) 子供に寂しい思いをさせてまで働こうとは思わない。(『父の帽子』)
- (49) お母さんにはいろいろつらい思いもさせられた。(『大白蓮華』)

### 3.3.2 中国語における感情形容詞の表現形式

中国語の形容詞の中に、心理作用を表すものがある。例えば、「开心, 兴奋, 愉快, 快乐, 骄傲, 大胆, 贪心, 伤心, 粗心, 悲痛, 心急, 暴躁, 急躁, 得意, 沉痛, 愤怒」などがある。これらの語は「很」の修飾を受けることができるが、目的語を取ることはできない。それは目的語を取れない心理動詞と同じである。

中国語の心理動詞と感情を表す形容詞の限界は曖昧である。しかし、心理動詞は「着/了」などの言葉と一緒に用いることができるが、形容詞は取ることができない。ここでは、感情を表す形容詞による文の表現形式について考察する。形容詞による感情表現は次の4つがまとめられる。

- ① X (感じ手) + 「很」 + A
- ② X + 「心里」 + 「觉得/感到」 + A
- ③ X / Y + 「是」 + A / V 「的」
- ④ Y (感情の誘因) + 「叫/让/使」 + X + 「觉得/感到」 + A

①と②は感じ手と述語だけがあると成立することができる表現である。この場合の感情の対象や誘因は文脈から分かる。①の形容詞述語だけの表現は、ふつう「很」「非常」「十分」などの程度副詞が共起する。例えば、(50)と(51)である。

- (50) 我很快乐。
- (51) 她非常悲伤。

①は単に感情を表すものである。感情的性状の形容詞の場合、「X + 很 + A」の構文(表現形式)で

表すと、主語の感情を示すのではなく、主語の属性を示す。感情的性状の形容詞は感じ手が表に出ない。「觉得／感到」などの心理動詞を伴わない場合、表出していない感じ手「我」の感情の対象になる。

②は「心里」と「觉得／感到」を介して、主語の感情を表す。この「X + 觉得／感到 + A」という用法は「心里」という詞を付け加え、あるいは「觉得／感到」を伴って、「X + 心里 + A」だけになってもよい。「心里」は場所を表す言葉であり、感じ手の感情の発する場所、つまり、「心」を用いて、感情を表す。

表現形式から見ると、「心里 + A」は確かに感情表現として欠かせない表現の1つである。「我很高兴」と「我心里很高兴」の意味は同じであるが、「心里」を伴う文は、感じ手その人の感情を強調する。以下の例は、それに該当する。

- (52) 这一年，从惧怕被收容遣送回家到当起保姆，她心里觉得“踏踏实实”。
- (53) 他能有回话的机会，心里觉得高兴。
- (54) 她今天没水做饭了，这咋办？心里着急，脸上可没露出来，过路人喝够了水，道了谢。
- (55) 与他热恋后，他经常领我去参加各界名流的私人“趴踢”，并逢人便向别人介绍我是他的女友，让我听了心里美滋滋的。

さらに、③の「X / Y + 是 + A / V 的」という使い方もある。

- (56) 我说，那晚真的很不愉快，本应该是很开心的。
- (57) 我的确是厌倦了，因此对于头儿的话，不再无条件地执行了。
- (58) 当他只有朦胧的感受和感情，有创作的冲动却写不出作品时，他是苦恼的。

(56) ~ (58) の「X / Y 是 A / V 的」という用法もしばしば見られる。動詞や形容詞の前にある「是」はその感情を強調すると思われる。「是」の前は感じ手でも感情の誘因でもよい。(56) は「他」という感じ手を主語とするが、その前に誘因が明示

されている。(57) と (58) はあることが誘因となり、起こした感情が「是」と「的」の中にある。

換言すれば、話し手がある原因によって、起きた感情を自分なりの見方で解釈して、その感情を「是……的」という括弧に入れたと言える。

④の使役による構文（表現形式）も、感情形容詞や感情動詞によって、感情を表出する構文（表現形式）であるが、中国語の感情を表現する特別な構文（表現形式）であり、次の節で考察する。

### 3.3.2.1 使役表現「叫／让／使／令」による感情表現

統語的な観点から中国語の感情表現を見ると、動詞文と形容詞文のほかには、使役による構文（表現形式）や介詞「为，替」を用いる表現形式など特殊な表現が挙げられる。なお、中国語における動詞と形容詞の限界がはっきりと言えないため、「叫／让／使／令」による感情表現は、状態に対する描写なので形容詞と考え、感情形容詞の部分において考える。それに対しては、介詞「为，替」を用いる表現形式は、「誰かのために～をする」、「誰かの代わりに～をする」の意味があるので動詞と考え、次章において考えていく。

まず、使役による感情表現を考察する。使役というのは、使役者が被使役者にある動作や状態変化をするように仕向ける、すなわち、感情を自発的に起こすはずの感じ手が、使役文では受動的な立場となるということである。中国語の使役表現は「叫／让／使／令」により表す。構文形式（表現形式）は、「Y（感情の誘因）+ 叫／让／使／令 + X（感じ手）+ V」、「Y（感情の誘因）+ 叫／让／使／令 + X（感じ手）+ 觉得／感到 + A」の2種類がある。

使役表現による感情表現は使役という表現形式で表現するが、意味的にはふつうの使役と同じく、誰かがどうこうするという意志的なものではない。使役者の位置にあるのは、意志的に働きかけをするものではなく、感情の誘因と言える。感情の誘因は動詞フレーズでも名詞フレーズでもよい。人称名詞でも使える。Y が人称名詞の場合は能動的な使役者ではなく、同じく感情を引き起こす原因を表す。

- (59) “那个可怜的女人哪！我真怕跟她见面。当然，我也知道，这种场面多么使人难过。”
- (60) 有的年轻教师干脆当着系领导的面说：“这里

的奖金低得使人无法忍受！”

使役による表現形式では、被使役者の位置にある X はふつう経験者とされる。つまり、心理の状態変化を経験した側である。中国語の使役は「叫／让／使／令」の使役動詞による表現である。「令」はやや古い言い方で、「叫」と「让」の性質は近い。

「让」を用いる文は被使役者が動作者主として意志性動詞とともに使うが、「使」を用いる文は、被使役者が経験者主として非意志性動詞と共に用いる。心理動詞はふつう非意志動詞と見られる。(61)～(65)は「使」が非意志動詞と共に起る例である。

- (61) 可是情绪变幻无常，我们往往连原因都说不出来。假如有什么事情使我生气，使我心烦意乱，我不能说不烦就不烦。
- (62) 我深知，此刻只要稍一左顾右盼，就无异于向我们的捕获物发出警告，这种暗示足以使他紧张不安并且溜掉。
- (63) 第一天晚上我邀请你下楼到这里来的时候，你就使我迷惑不解。
- (64) 他读过塔尔德著作，那里谈到改良监狱装有电铃，使用电刑，而那种经过改良的暴行却使他更加气愤。
- (65) 小伙子的回答，使我愣住了，“什么60元？你看清楚，这是正宗青岛皮鞋！”

しかし、感情表現には Y が経験者であるが、「让」を用いる例もある。例えば、(66)と(67)である。

- (66) 希望今天的表现没有让他们失望。
- (67) 小镇单调的生活让他烦躁异常，他觉得生活不应该只限于日落百息，日出而作，到了年龄就娶个从小到大天天见面的姑娘为妻，周末去教堂进晚餐等等毫无变化的重复。

上に示した例の中での「让」を「使」に交換してもよい。中国語の使役文には、(68)と(69)のように、不確定の第3者を「人」という言葉を用いることで、話し手自身の感情を表す。

- (68) 对爱情忠贞，对婚姻负责，和母亲结婚已近50年，至今仍恩爱无比，令人称羨。
- (69) 他故意模仿车站播音员的口气，用夹生的普通话，喊道：“到朱官乡的车就要开了，快上车啦。”使人忍俊不禁。

中国語における他人を表す表現「令人」「使人」「让人」などによって、自分の気持ちを表出する。このような「令人」「使人」「让人」による表現は、大抵の人がその原因により同様の感情を起こすと、話し手が推測したからであろう。しかし、「令人」「使人」「让人」は感情を一般化しているとは言え、話し手以外の特定の人を指すことはできない。つまり、(68)は「令我」、(69)は「使我」に変えても同様な意味の文となると言えるが、「令他」「使他」などの意味にならない。また、使役の構文（表現形式）形式は「N1 + V1 + N2 + V2」という形で表すこともできる。言い換えると、「V1」は「叫／让／使／令」などの使役動詞であって、「V2」は「V1」の引き起こした結果と言われる。

感情表現の「N1」は、通常、原因を表わし、「N2」は経験者を表すのはすでに述べた。「V2」は「V1」から引き出した成分である。例文の(67)を見てみよう。「小镇单调的生活让他烦躁异常（小さな町の単調な生活は彼を異常なほどいらいらさせる。）」では、原因となる「N1」が「小镇单调的生活」であり、経験者となる「N2」が「他」である。そして、「V2」の「烦躁异常（異常なほどいらいらする）」という状態は、「V1」の「让」という使役動詞によってもたらされた。兼語文（兼語文では前半の文章では目的語に、後半の文章では主語にと、1つの単語が2つの役割を兼ねることからこの単語を兼語と言い、このような文章は兼語文と呼ばれる。例えば、「他请你去。（彼はあなたに行くようにお願いする。）」では、「你」は兼語に当り、文の前半で目的語「あなたにお願いする」に、後半の文では主語「あなたは行く」になる。）の中の「V2」は時間副詞、例えば、「已经」、「将要」、「正在」やテンスを表す「了」「着」「过」などを付け加えることができないので、静態的なものであると言える。そして、「N1 V1 N2 V2」の中で、「V1」は主要動態動詞であるので、「V2」は、「V1」の必須成分の1つとして、「V1」の行為を通じてどのようになったという結果を表す。すなわち、使役動詞には、原因、経験者と結果の3つの成分が必要である。使役による構文（表



現形式)の感情表現の「V2」は、心理動詞のほかに、行為心理動詞の「觉得／感到」に形容詞や文を付け加える表現もある。以下に、これに該当する例を挙げる。

- (70) “哼，这坏蛋，”他心里想，带着几分义愤和同情，“这么无情无义，太让那个小姑娘伤心了。”
- (71) 他们谈话的平等口气很让我愉快，但是一个长了胡子的人还在上学，这有点让人难接受。
- (72) 钢琴手又开口说话：“白莲不爱田亮，就想把自己的妹妹送给他，可是，田亮偏偏又不喜欢她的妹妹，令白莲十分难过。”
- (73) 正因为他是爱开口笑的人，所以他的吞声哭使人觉得格外悲哀，格外严肃。

前に挙げた「V2」と同じように、「觉得／感到」による述語も結果を表している。

### 3.4 感情形容詞による感情表現の日中対照

感情表現というのは、人間の心の動きを表す表現である。日本語の感情形容詞文は、話し手の感情を直接的、主観的に表す構文(表現形式)で、話し手以外の感情を表せないため、人称制限が中国語より厳しい。そのため、日本語の感情形容詞文は、現在形の場合、感じ手は1人称でなければならない。また、特定の場合を除く、感情形容詞文の主語は1人称に限定される。感じ手は、普通、取り立てて「ハ」によって示し、感情の向う対象・誘因は「ガ」によって示す。その中に、感じ手は必須成分であるが、感情の対象は述語によって、必要とする度合が様々である。

中国語の場合では、今までの研究と異なるところが見つかった。中国における感情表現は、常に動詞で表されるが、形容詞によって感情が表出される場合もある。ただし、その場合は、形容詞と共起する動詞がなければならない。

## 4. 終わりに

相対的視点から日中両語の相互関係を見ると、中国語の感情表現は日本語のそれより豊かである。しかし、日本語の感情表現の形式が明確であるのに対

し、中国語の場合はやや複雑である。そのため、日本語での感情形容詞文に対応する中国語の表現形式では、動詞文、使役文、介詞が用いられ、感情表現には、中国語の感情動詞文と使役文が対応する。

日中両語における感情表現の違いの1つとして、「形容詞連用形+なる」と対応する文は、「X+变得／变成+A」の構文(表現形式)ではなく、気持ち・感情を表す「X+觉得／感到+A」、あるいは「X+V+起来」で表す。

本研究は、感情形容詞を中心に、日本語と中国語が感情を表す際の語彙的・統語的特徴について考察し、両言語の対応上の異同に関する考察を試みるものである。

### 参考文献

- 荒川清秀. 1985. 「日本語と中国語—中国語の感情(感覚)形容詞について—」『日本語学』3月号, pp.62-65.
- 耿二嶺. 1986. 『現代汉语知识丛书·汉语拟声词』武漢:湖北教育出版社.
- 朱德熙. 1982. 『语法讲义』北京:商務印書館.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』東京:くろしお出版.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味 II』東京:くろしお出版.
- 中村明. 1993. 『感情表現辞典』東京堂出版.
- 西尾寅弥. 1972. 『形容詞の意味・用法の記述的研究』東京:秀英出版.
- 西尾寅弥. 1993. 「喜び・楽しみのことば」『日本語学』1月号, pp14-22.
- 北京大学中国言語学研究センター. 『現代漢語コーパス』2012年11月.  
[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/index.jsp?dir=xiandai](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai).
- 森山卓郎. 1988. 『日本語動詞述語文の研究』東京:明治書院.

### ◆著者紹介

鄒 賢 Zou Xian

京都コンピュータ学院教職員  
同志社大学大学院文化情報学研究科博士前期課程修了、文化情報学修士。  
比較文化学会、文化情報学会会員。